

一栄谷の 異見私見



2015年農業セン

サスでの年齢別農業就業者人口をみると階層別では65、69歳層が最多となっているが、これまでは昭和一桁世代が高台山を形成していたのに対して、65、69歳層が最多とはいえ山は低くなっている。45、65歳層も減少しているが、30、44歳層はほぼ変わっていないことから、全体としてはまだまだ起伏をなすに至っている。これを見ると昭和一桁世代のリタイアが急であるのに対して、65、69歳層が多である要因として定年帰農の進展もあげられているのをはじめとして、順送りによる交代だけでなく、担い手の多様化によるからうことこれに対処しようとしていることが伺われる。

こうした中、先月の中旬、仙台拠点設置店舗を持たない宅配型の生協である「あいこーみやぎ」が主催する地場生産者研修会に足を運ぶ機会を得たが、ここでまさに多様な担い手づくりによって世代交代に真正面から取り組んでいる現場に直接触れることができた。

全体で50人ほどが集まった研修会であっ

たが、参加者の第一が資源循環型で米・野菜等の生産に取り組む大郷グリーンファーマーズや特はさま自然村等の農業者が集まって法人化しているグループ。ここには震災復興としてトマトやホウレンソウ等の施設栽培に、70歳代を含まない農家がいくつもあって立ち上がりながらも、就農6年目の若手がリタイアとなって牽

産消連携で 後継者を育てる

引しているグローバルファームも入る。第二が、I・リタイア組で、脱サラして秋保で農業研修を受けたら軒が、2009年から本格就農して有機農業に取り組んでいる秋保ゆきの会。障害者の就業支援によって豚や野菜、イチゴを生産しているわはわ田尻、わはわ美里もある。第三が高齢者等によるブランチ農業であるあいこーみやぎが主催する農

業体験講座を終了したリタイア組や主婦等20名ほどが集まって借地で多様な野菜を栽培するとともに、援農も行っている。そしてこれに第4として、普通の家族経営を行っている農業者等が加わる。まさに多様な担い手が一堂に会しての熱い研修会であったが、最年長が60歳前後で3、4代が中心で、世代交代は著しい。これにもなっているのが技術の継承・獲得と販売先の確保である。あいこーみやぎの組合員がこれら生産者の作った農産物を買っていることほ勿論であるが、ベテラン農業者や外部講師を招いて技術を獲得・交流していく機会を頻繁に提供するとともに、見学にとどまらず体験や援農も含めた組合員消費者と生産者との直接的な交流に大きな工夫を注いでいる。

これは一つの事例ではあるが、担い手確保のためには後継者の育成とともに、外部からの人材の獲得が不可欠であり、これは消費者側が大きな力を発揮している好例といえる。多様な担い手をつないで地域農業を振興していくのに生産者としての協同・連携が欠かせないことは言うまでもないが、消費者や流通サイドの力も必要不可欠であり、産消連携・食農連携をより具体化・深化させていくことが重要な力ぎを握っていることを示唆している。(農的社会学デザイン研究所代表)